

神鷺之卷

泉鏡花

青空文庫

しらさぎみようじん 白鷺明神の祠へ——一緑の森をその峰に仰いで、小県銚吉おがたせんきちがいぎ詣でようとする、案内に立ちそうな村の爺さんが少なからず難色あらを顕わした。

この爺さんは、

「——おらが口で、更あらためていうではねえがなす、内の媼おばあは、へい一通りならねえ巫女いちこです。」「……」

若い時は、渡り仲間の、のらもので、狛かり夫ゆうどを片手間に、小賭博こばくちなども遣やるらしいが、そんな事より、古女房が巫女というので、聞くものに一種の威力があつたのはいうまでもない。

またその媼うばい巫女いちこの、巫術ふじゆつの修煉しゅうれんの一通りのものでない事は、読者にも、間もなく知れよう。

一体、孫八が名だそうだ、この爺さんは、つい今しがた、この奥州、関屋の在、旧——街道わきの古寺、西明寺さいみようじの、見る影もなく荒涼あれすさんだ乱塔場で偶然知ちかづ己きになつたので。

それから——無住ではない、住職の和尚は、齋ときかせ稼かせぎに出て留守だった——その寺へ伴われ、庫裡くりから、ここに准胝じゆんてい觀世音いかなんぜおんの御堂みどうに詣もでた。

いま、その御廚子みずしの前に、わずかに二三畳の破やれた畳たたみの上に居るのである。

さながら野晒のさつしの肋骨あばらぼねを組合わせたように、曝され古びた、正面の閉した格子を透いて、向う峰の明神の森は小さな堂の屋根を包んで、街道を中に、石段は高いが、あたかも、ついそこに掛けた、一面墨絵の額、いや、ざつと彩つた絵馬のごとく望まるる。

明神は女体におわす——爺さんがいうのであるが——それへ、詣もずるのは、石段の上の拝殿までだが、そこへ行くだけでさえ、清しやうじやう淨じやうと齋さい戒かいがなければならぬ。奥の大巖おおいわの中腹に、祠が立つて、恭うやうやしく齋いつき祭つた神像は、大深秘で、軽々しく拝まれない——だから、参つた処で、その効かいはあるまい……と行くのを留めたそうな口吻くちふりであつた。

「ごく内々の事でがすかなす、明神様のお姿というのはなす。」

時に、勿体ないが、大破落壁した、この御堂の壇に、觀音の緑髪、朱唇しゆしん、白衣びやくえ、白し木彫らきぼりの、み姿の、片扉金具の抜けて、自おのずから開いた廚子から拝されて、誰たが捧たげたか、

花瓶の雪の卯の花が、そのまま、御袖みそで、裳もすそに紛まがいつつ、銚吉が参らせた蠟燭ろうそくの灯に、格ごうてんじよう天井を漏る昼の月影のごとく、ちらちらと薄青く、また金色こんじきの影がさす。

「なす、この観音様に、よう似てござらっしゃる、との事でなす。」……

ただこの観世音の麗相を、やや細面にして、玉の皓^{しろ}きがごとく、そして御髪^{みぐし}が黒く、やつぱり唇は一点の紅である。

その明神は、白鷺の月冠をめしている。白衣で、袴^{はかま}は、白とも、緋^ひともいうが、夜の花の朧^{おぼろ}と思え。……

どの道、巖^{いわ}の奥殿の扉を開くわけには行かないのだから、偏^{ひとえ}に観世音を念じて、彼処^{かしこ}の面影^{しん}を偲^{しの}べばよからう。

爺さんは、とかく、手に取れそうな、峰の堂——絵馬の裡^{なか}へ、銚吉を上らせまいとするのである。

第一可^{おそろし}恐いのは、明神の拝殿の薮^{しとみ}うち、すぐの承塵^{なげし}に、いつの昔に奉納したのか薙^{なぎ}刀^たが一^{ひとふり}振^ふかかっている。勿論誰も手を触れず、いつ研いだ事もないのに、切味^{きれあじ}の鋭さは、月の影に翔^{かけ}込む梟^{ふくろう}、小春日になく山鳩は構^{かま}いない。いたずらものの野鼠は真二つになつて落ち、ぬたくる蛇は寸断^{すたすた}になつて蠢^{うごめ}くほどで、虫^{けだもの}、獣も、今は恐れて、床、天井を損^こわない。

人間なりとて、心柄によつては無事では済まない。かねて禁断であるものを、色^{めし}に盲^めい

て血気な徒が、分別を取はずし、夜中、御堂へ、村の娘を連込んだものがあつた。隔ての帳も、簾もとばりすだれないのに――

――それが、何と、明い月夜よ。明神様もけなりがつつろと、二十三夜の月待の夜話よばなしに、森へ下弦の月がかかるのを見て饒舌しゃべつた。不埒ふらちを働いてから十五年。四十を越えて、それまでは内々恐れて、黙つていたのだが、――祟たたるものか、この通り、と鼻をさして、何の罰が当るかい。――舌も引かぬに、天井から、青い光がさし、その百姓屋の壁を抜いて、散りかかる柳の刃がキラリと座のものの目に輝いた時、色男の顔から血しぶきが立つて、そぎ落された低い鼻が、守宮やもりのように、畳でピチピチと刎はねた事さえある。

いま現に、町や村で、ふなあ、ふなあ、と鼻くたで、因果と、鮎鱈ふなじょうを売っている、老ぼれがそれである。

村若衆わかしゅの堂の出合は、ありそうな事だけれど、こんな話はどこかに類がないでもなかろう。

しかし、なお押重ねて、爺さんが言った、……次の事實は、少からず銚吉を驚かして、胸さきをヒヤリとさせた。

余り里近なせいであろう。近頃では場所が移った。が、以前は、あの明神の森が、すぐ、

いつも雪の降ったような白鷺の巣であつた。近く大正の末である。一夜に二件、人間二人、もの凄^{すご}い異状が起つた。

その一人は、近国の門閥^{もんぼつか}家で、地方的に名望權威があつて、我が儘^{まま}の出来る旦那^{だんな}方。人に、鳥博士と称^{とな}えられる、聞こえた鳥類の研究家で。家には、鳥屋というより、小さな博物館ぐらいの標本を備えもし、飼つてもいる。近県近郷の学校の教師、無論学生たち、志あるものは、都会、遠国からも見学に来^{きた}り訪^とうこと、須賀川の牡丹^{ぼたん}の觀賞に相^{あい}齊^{ひと}しいで、いずれの方面からも許されて、その旦那の紳士ばかりは、獵期、禁制の、時と、場所を問わず、学問のためとして、任意に、得意の獵銃の打金をカチンと打ち、生きた的に向つて、ピタリと照準する事が出来る。

時に、その年は、獲ものでなしに、巢の白鷺の産卵と、生育状態の実験を思立たれたという。……雛^{ひよ}ツ子はどんなだろう。鶏や、雀と違つて、ただ聞いても、鴛鴦^{おしどり}だの、白鷺のあかんぼには、博物にほとんど無関心な銚吉も、聞きつつ、早くまず耳を傾けた。

在所には、旦那方の泊るような旅館がない。片原の町へ宿を取つて、鳥博士は、夏から秋へかけて、その時々。足繁くなると、ほとんど毎日のように、明神の森へ通つたが、思ふ壺の巢が見出せない。

——村に獵夫が居る。獵夫といつても、南部の猪や、信州の熊に対するような、本職の、またぎ、おやじの雄ではない。のらくらものの隙稼ぎに鑑札だけは受けているのが、いよいよ獲ものに困ずると、極めて内証に、森の白鷲を盗み撃する。人目を憚るのだから、忍びに忍んで潜入するのだが、いや、どうも、我折れた根気のいい事は、朝早くでも、晩方でも、日が暮れたりといえどもで、夏の末のある夜などは、ままよ宿鳥なりと、占めようと、右の獵夫が夜中真暗な森を徜徉うちに、青白い光りものが、目一つの山の神のように動いて来るのに出撞した。けだし光は旦那方の持つ懷中電燈であつた。が、その時の鳥旦那の装は、杉の葉を、頭や、腰のまわりに結びつけた、面まで青い、森の悪魔のように見えて、獵夫を息を引いて驚倒せしめた。旦那の智恵によると、鳥に近づくには、季節によつて、樹木と同化するのと、また鳥とほぼ服裝の彩を同じゆうするのが妙術だという。

それだから一夜に事の起つた時は、冬で雪が降つていたために、鳥博士は、帽子も、服も、靴まで真白にしていた、と話すのであつた。

(……………)

ところで、鳥博士も、獵夫も、相互の仕事が、両方とも邪魔にはなるが、幾度も顔を

合わせるから、逢えば自然と口を利く。「ここのおつかい姫は、何だな、馬鹿に恥かしがり屋で居るんだな。なかなか産む処を見せないが。」「旦那、とんでもねえ罰が当る。」「撃つやつとどうかな。」「段々秋が深くなると、「これまでの渡りものの、やす女だ、侍女も上等のになると、段々勿体をつけて奥の方へ引込むな。」「従って森の奥になる。」「今度見つけた巢は一番上等だ。鷺の中でも貴婦人となると、産は雪の中らしい。人目を忍ぶんだな。産屋も奥御殿という処だ。」「やれ、罰が当るてば。旦那。」「撃つやつとどうかな。」「雪の中に産育する、そんな鷺があるかどうかは知らない。爺さんの話のまま——獵夫がこの爺さんである事は言うまでもなからうと思う。さて獵夫が、雪の降頻る中を、朝の間に森へ行くと、幹と根と一面の白い上に、既に縦横に靴で踏込んだあとかあった。——畜生、こんなに疾くから旦那が来ている。博士の、静肅な白銀の林の中なる白鷺の貴婦人の臨月の觀察に、ズトン！は大禁物であるから、睨まれては事こわしだ。一旦破寺——西明寺はその一頃は無住であつた——その庫裡に引取つて、炬に焚火をして、弁当を使つたあとで、出直して、降積つた雪の森に襲い入ると、段々に奥深く、やがて向うに青い水が頭われた、土地で、大沼というのである。

今はよく晴れて、沼を囲んだ、樹の袖、樹の裾が、大なる紺青の姿見を抱いて、化

粧するようにも見え、立圀つた幾千の白い上臈が、瑠璃の咬殿を繞り、碧橋を渡つて、風に舞うようにも視められた。

この時、煩惱も、菩提もない。ちようど汀の銀の蘆を、一むら肩でさらりと分けて、雪に紛う鷺が一羽、人を払う言伝がありそうに、すらりと立つて歩む出端を、ああ、ああ、ああ、こんな日に限つて、ふと仰がるる、那須嶽連山の嶺に、たちまち一朶の黒雲の湧いたのも気にしないで、折敷にカンと打った。キャツ！と若い女の声。魂ぎる声。這つたか、飛んだか、這つたか。獵夫が目くるめて駆付けると、凍てぎまの白雪に、ぼた、ぼた、ぼたと紅が染まつて、どこを撃つたか、黒髪 of 乱れた、うつくしい女が、仰向けに倒れ、もがいた手足をそのままに乱れ敷いていたのである。

いやが上の恐怖と驚駭は、わずかに四五間離れた処に、鳥の旦那が真白なヘルメット帽、警官の白い夏服で、腹這になつてゐる。「お助けだ——旦那、薬はねえか。」と自分が救われたそうに手を合せた。が、鳥旦那は——鷺が若い女になる——そんな魔法は、俺が使つたぞ、というように知らん顔して、遠めがねを、それも白布で巻いたので、熟とどこかの樹を枝を凝視めていて、ものも言わない。

獵夫は最期と覺悟をした。……

そこで、急いで我が屋へ帰って、不断、常住、無益な殺生を、するな、なせそと戒める、古女房の老巫女いちこに、しおしおと、青くなつて次第を話して、……その筋へなのつて出るのに、すぐに梁はりへ掛けたそうに禪ふんとしをしめなおすと、梓あずさの弓を看板に掛けて家業にはしないで、茅屋あばらやに隠れてはいるが、うらないも祈禱きとうも、その道の博士だ——と言う。どういふものか、正式に学校から授けない、ものの巧者は、学士を飛越えて博士になる。博士神巫いちこが、亭主が人殺しをして、唇の色まで変つて震えているものを、そんな事ぐらいで留めやはしない……冬の日の暗い納戸で、糸車をじい……じい……村も浮世も寒さに喘息ぜんそくを病んだように響かせながら、獵夫に真裸まつばだかになれ、と齒莖しを緊めて巖おごそかに言つた。経帷子きようかたびらにでも着換えるのか、そんな用意はねえすべい。……井戸川で凍死こごえじにでもさせる氣だろ。しかしその言の通りにすると、蓑みのを着よ、そのようなその羅紗ろしゃの、毛くさい破帽子やぶれなどは脱いで、菅笠すががさを被かぶれという。それで、へい、芋殻おがらか、青竹の杖つえでもつくか、と聞くと、それは、ついてもつかいでも、のう、もう一度、明神様の森へ走つて、旦那そなが傍そばに居ようと、居まいと、その若い婦女おんなの死骸しがいを、蓑の下へ、膚はだづけに負いまして、また早や急いで帰れ、と少し早めに糸車を廻わしている。

いや、もう、肝魂きもたまを消して、さきに死骸の傍を離れる時から、那須風なすおろしが真黒まっくろにな

つて、再び、日の暮方の雪が降出したのが、今度行向う時は、向風の吹雪になった。が、寒さも冷たさも獺夫は覚えぬ。ただ面を打つて巴ともえまんじに打ち乱れる紛ふんばく泪の中に、かの薙なぎ刀の刃がギリリと光つて、鼻耳をそがれはしまいか。幾度立ちすくみになったやら。

……

我が手で、鉄砲でうった女の死骸を、雪を搔かいて膚におぶつた、そ、その心持というものは、紅蓮大紅蓮の土壇どたんとも、八寒地獄の磔はりつけ柱ばしらとも、譬たとえように口も利けぬ。ただ吹雪に怪飛けしとんで、亡者のごとく、ふらふらと内へ戻ると、媼うばみこ巫女は、台所の筵むしろ敷じきに居い敷しかり、出刃庖丁をドギドギと研いでいて、納戸の炉に火が燃えて、破鍋われなべのかかったのが、阿鼻あびとも焦熱すさまとも凄じい。……「さ、さ、帯を解け、しての、死骸を俎まないたの上へ、」というが、石でも銅あかがねでもない。台所の俎で。……媼うばの形相は、絵に描いた安達ヶ原あたちがはらと思うのに、頸くびには、狼の牙きばやら、狐の目やら、鼬いたちの足やら、つなぎ合せた長数珠ながじゆずに三重みえに捲まきながらの指図でござった。

……不思議というは、青い腰も血の胸も、死骸はすっくり俎の上へ納つて、首だけが土間へがつくりと垂れる。めつたに使つたことのない、大俵の炭をぶちまけたように髻もとどりが砕けて、黒髪が散りかかる雪に敷いた。媼が伸上り、じろりと視みて、「天人おんなのような婦やな、

羽衣を剥け、剥け。」と言う。襟も袖も引き^{むし}る、と白い優しい肩から脇の下まで仰向け^{あおもむ}に露われ、乳へ膝を折上げて、くくられたように、踵^{かかと}を空へ屈めた姿で、柔にすくんでいる。 「さ、その白ツこい、膏^{あぶら}ののつた双ももを放さつしやれ。獣^{けだもの}は背中に、鳥は腹に肉があるという事いの。腹から割^さかつしやるか、それとも背から解^{ひら}くかの、」と何と、ひたわななきに戦^{わなな}く、獵夫の手に庖丁を渡して、「えい、それ。」媼^{おな}が、女の両脚を餅のように下へ引くと、腹が、ふわりと動いて胴がしんなりと伸び申したなす。

「観音様の前だ、旦那、許さつせえ。」

御廚子の菩薩^{ぼさつ}は、ちらちらと蠟燭の灯に瞬きたまう。

——茫然^{ぼうぜん}として、銚吉は聞いていた——

血は、とろとろと流れた、が、氷つたように、大腸小腸^{おわたこわた}、赤肝^{あかぎも}、碧胆^{あおぎも}、五臓は見^ある見る解^あき発^はかれ、続いて、首を切れと云う。その、しなりと俎の下へ伸びた皓々^{しろじろ}とした咽喉^{のどくび}首に、触ると震えそうな細い筋よ、蕨^{わらび}、ぜんまいが、山賤^{やましず}には口相応、といつて、獵夫だとして、若い時、宿場女郎^{まいらせそ}の、※もかしくも見たれど、そんなものがたとえになろうか。……若菜の二葉の青いような脈筋が透いて見えて、庖丁の当てようがござらない。容顔^{きおく}が美麗なで、氣後れをするげな、この痴氣^{たわけ}おやじと、媼はニヤリ、「鼻をそげそげ、思

切つて。ええ、それでのうては、こな爺い、人殺しの解死人は免れぬぞ、」と告り威す。

——命ばかりは欲しいと思ひ、ここで我が鼻も薙刀で引そがりよう、恐ろしさ。古手拭

で、我が鼻を、頸^{ぼんのくぼ}へ結えたが、美しい女の冷い鼻をつるりと撮み、じよきりと庖丁

で刎ねると、ああ、あ痛、焼火箸で掌を貫かれたような、その疼痛に、くらんだ目が、

はあ、でんぐり返つて気がつけば、鼻のかわりに、細長い鳥の嘴を握つていて、俎の上

は、ただ腹を解いた白鷺が一羽。蓑毛も、胸毛も、散りぢりに、血は俎の上と、鷺の首と、

おのが掌にたらたらと塗れていた。

媼が世帯ぶつて、口輕に、「大ごなしが済んだあとは、わしが手でぶつぶつと切つてお

ましよ。鷺の料理は知らぬなれど、清汁か、味噌か、焼こうかの。」と櫓をほだて、鍋を

揺ぶつて見せつけて、「人間の娘も、鷺の婦も、いのち惜しさにかわりはないぞの。」と

いわれた時は、俎につくばい、鳥に屈み、媼に這つて、手をついた。断つ、断つ、ふツつ

りと獵を断つ、慰みの無益の殺生は、断つわいやい。

畠二三枚、つい近い、前^{まえなわて}の夜の雪路を、狸が葬式を真似るように、陰々と火が

ともれて、人影のざわざわと通り過ぎたのは——真中に戸板を昇っていた。——鳥旦那

の、凍えて人事不省なつたのを助け出した、行列であつた。

町の病院で、二月以上煩ったが、凍傷のために、足の指二本、鼻の尖が少々、とれた、ぞげた、欠けた、はて何といおう、もげたと言おう、もげた。

どうも解せぬ。さて、合点のゆかない。現におつかい姫を、鉄砲で撃った獵夫は、肝を潰しただけで、無事に助かった。旦那はまず不具だ。巢を見るばかりで、その崇りは、と内証で声をひそめて、老巫女に伺を立てた。されば、明神様の思召しは、鉄砲は避けもされる。また眷属が怪我に打たれまいものではない。——御殿の閨を覗かれ、あまつさえ、帳の奥のその奥の産屋を——おみずからではあるまいが——お煩い……との事である。

要するに、御堂の女神は、鉄砲より、研究がおきらいなのである。——

「——万事、その気でござらっしゃれよ。」

「勿論です——」

が、まだその上にも、銚吉を一人で御堂へ行かせるのは、気づかいらしくもあり、好もしくない様子が見えた。すなわち明神の祠へは、孫八爺さんが一所に行こうという。銚吉とても、ただ怯かしばかりでもなさそうな、秘密と、奇異と、第一、人気のまるでないその祠に、入口に懸った薙刀を思うと、掛釘が錆朽ちていまいものでもなし、控えの綱な

ど断切れていないと限らない。同行はむしろ便宜であつたが。

さて、旧街道を——庫裡を一廻り、寺の前から——路を埋めた浅茅を踏んで、横切つて、石段下のたらたら坂を昇りかかつた時であつた。明神の森とは、山波をつづけて、なだらかに前来た片原の町はずれへ続く、それを斜に見上げる、山の端高き青芒、蕨の広葉の茂つた中へ、ちらりと出た……さあ、いくつぐらいだらう、女の子の紅い帯が、ふと紅の袴のように見えたのも稀有であつた、が、その下ななめに、草堤を、田螺が二つ並んで、日中の畝うつりをしているような人影を見おろすと、

「おん爺いええ。」

と野へ響く、広く透つた声で呼んだ。

貝の尖の白髪さきしろがの田螺が、

「おお。」

「爺ン爺いよう。」

「……爺ン爺い、とこくわ——おおよ。」

「媼おばン媼おばが、なあえ、すぐに帰つて、ござれとよう。」

「酒でも餅でもあんめえが、……やあ。」

「知らねえよう。」

「客人と、やい、明神様詣るだと、言うだあよう。」

「何でも帰れ、とよう。媼あん媼が言うだがええ。」

なぜか、その女の子、その声に、いや、その言托ことづけをするものに、銚吉さえ一種の威のあるのを感じた。

「そんでは、旦那。」

白髪むぎわらぼうの田螺は、麦稈帽の田螺に、ぼつりと分れる。

二

「——何だ、薙刀なぎなたというのは、——絵馬の画え——これか。」

あの、爺い。口さきで人を薙刀に掛けたな。銚吉は御堂の格子を入れて、床の右横の破や欄間れらんまにかかった、絵馬を覗みて、吻ほっと息を吐つきつつ微笑ほほえんだ。

しかし、一口に絵馬とはいいが、入念じゆねんの彩色さいしき、塗柄まきえの蒔絵まきえに唐草さえある。もっとも年数のほども分らず、納ぬしおさめの文字などは見分けがつかない。けれども、塗柄を受けた

服紗ふくさのようなものは、紗綾さやか、緞子どんすか、濃い紫をその細工ものに縫込んだ。

武器は武器でも、念流、一刀流などの猛者もさの手を経たものではない。流儀の名しづかの、静しづかも優しい、婦人の奉納に違いない。

眉まゆも胸なごやも和なごやになった。が、ここへ来てたたずゝむまで、銚吉は実は瞳を据え、唇を緊しめて、驚す破わといわばの氣構きがまえをしたのである。何より聞怯ききおじをした事は、いささかたりとも神慮に背くと、静しづ流かりゆうがひらめくとともに、鼻を殺そがるる、というのである。

これは、生命いのちより可おそろし恐おそろしい。むかし、悪あく性しやうの唐瘡とうがさを煩わづつたものが、廁かわやから出て、嚏くしゃみをした拍子に、鼻が飛んで、鉢前をちよろちよろと這つた、二十三夜講の、前さきの話はなしを思おもひ出した。——その鼻の飛んだ時、キャツと叫ぶと、顔の真中まんなかへ舌が出て、もげた鼻を追掛おつかけたというのである。鳥博士のは凍傷と聞いたが、結果はおなじい。

鼻をそがれて、顔の真中へ舌が出たのでは、二度と東京が見られない。第一汽車に乗せなからう。

草生くさおいの坂を上る時は、日中三時さがり、やや暑さを覚えながら、幾度も単衣ひとえの襟を正した。

銚吉は、寺を出る時、羽織を、観世音の御堂に脱いで、着流しで扇を持った。この形は、さんげ、さんげ、金剛杖こうこうづえで、お山に昇る力もなく、登山靴で、嶽たけを征服するとかいう偉さもない。明神の青葉の砦とりでへ、見すばらしく降参をするに似た。が、謹んでその方が無事でいい。

石段もところどころ崩れ損じた、控綱ほしの欲いほど急ではないが、段の数は、累々と畳まつて、半身を、夏の雲に抽ぬいた、と思うほど、聳そびえていた。

ここに、思掛けなかったのは——不断ほとんど詣よずるものがない、無人むにんの境だと聞いただけに、蛇類のおそれ、雑草が伸茂つて、道を蔽おほうていそうだったのが、敷石が一筋、すつと正面の階段まで、常磐樹とぎわぎの落葉さえ、五枚六枚数うるばかり、草を靡なびかして滑かに通った事であつた。

やがて近づく、御手洗みたらしの水は乾いたが、雪の白山はくさんの、故郷ふるさとの、氏神を念じて、御堂の姫の影を幻に描いた。

すぐその御手洗みたらしの傍そばに、三抱みかかえほどなる大榎おおえのきの枝が茂つて、檜皮葺ひわだぶきの屋根を、森しん々と暗いまで緑に包んだ、棟かつおぎの鯉か木を見れば、紛まがうべくもない女神じよしんである。根上りの根の、譬たとえば黒い珊瑚礁さんごしょうのごとく、堆うづたかく築いて、青く白く、立浪たつなみを砕くように床の

縁下へ蟠つたのが、三間四面の御堂を、組棧敷のごとく、さながら枝の上に支えていて、下蔭はたちまち、ぞくりと寒い、根の空洞に、清水があつて、翠珠を湛えて湧くのが見える。

銚吉はそこで手を淨めた。

階段を静に――むしろ密と上りつつ、ハタと胸を衝いたのは、途中までは爺さんが一所に来る筈だった。鍵を、もし、錠がささついていれば、扉は開かない、と思つたのに、格子は押附けてはあるが、合せ目が浮いていた。裡の薄暗いのは、上の大樹の茂りであらう。及腰ながら差覗くと、廻縁の板戸は、三方とも一二枚ずつ鎖してない。

手を扉にかけた。

裡の、その真上に、薙刀がかかっている筈である。

そこで、銚吉がどんな可笑な態をしたかは、およそ読者の想像さるる通りである。

「お通しを願います、失礼。」

と云つた。

片扉、とつて引くと、床も青く澄んで朗か。

絵馬を見て、たたずゐんで、いま、その心易さに莞爾にっこりとしたのである。

思ひも掛けず、袖を射て、稲妻が飛んだ。桔梗ききよう、萩、女郎花おみなえし、一幅いっぷくの花野が水と

ともに床に流れ、露を縫った銀糸の照る、彩いろある女帯が目を打つと同時に、銚吉は宙を飛んで、階段を下へ匆はね落ちた。再び裾すそへ翻ひるがえるのは、柄長き薙刀はさきの刃尖である。その稲妻が、雨のごとき冷汗とあせを透して、再び光った。

次の瞬間、銚吉の身は、ほとんど本能的に大榎おおえのきの幹を小盾こだてに取つていた。

どうも人間より蟬に似ている。堂の屋根うらを飛んで、樹へ遁にげたその形が。——そうして、少時しばらくして、青い顔の目ばかり樹の幹から出した処は、いよいよ似ている。

柳の影を素膚すはだに絡まとうたのでは、よもあるまい。よく似た模様をすらすらと肩裳もすそへ、腰には、淡紅ときの伊達巻ばかり。いまの花野の帯は、黒格子を仄ほのかに、端なみが靡なびいて、婦人おんなは、頬の

かかり頸脚えりあしの白く透通る、黒髪くはみのうしろ向きに、ずり落ちた褌つまを薄く引き、ほとんど白しろ

脛らはぎに消ゆるに近い薄紅の蹴出しけだしを、ただなよなよと捌さばきながら、堂の縁の三方を、その

うしろ向きのまま、するすると行きゆき、よろよろと還かえつて、往ゆきつ戻りつしている。その取

乱ふりした態の、あわただしい中にも、媚なまめしさは、姿の見えかくれる榎の根の莊嚴に感じらる

るのさえ、かえつて露草の根の糸の、細く、やさしく戦そよぎ纏もつれるように思わせつつ、堂の

縁を往来した。が、後姿のままで、やがて、片扉開いた格子に、ひたと額をつけて、じつと留まると、華奢な肩で激しく息をした。髪が髭のごとくさらさらと揺れた。その立つて、踏みぐくめつつも乱れた裾に、細く白々と鳥の羽のような軽い白足袋の爪尖が震えたが、半身を扉に持たせ、半ばを取纏って、柄を高くついた、その薙刀が倒で……刃尖が爪先を切ろうとしている。

戦は、銚吉が勝らしい。由来いかなる戦史、軍記にも、薙刀を倒についた方は負である。同時に、その刃尖が肉を削り、鮮血が踵を染めて伝わりそうで、見る目も危い。

青い蟬が、かなかなのような調子はずれの声を、

「貴女、貴女、誰方にしましても、何事にしましても、危い、それは危い。怪我をします。怪我をします。気をおつけなさらないと。」

髪を分けた頬を白く、手首とともに、一層扉に押当てて、

「あああ」

とやさしい、うら若い、あどけないほどの、うけこたえとまでもない溜息を深くすると、

「小泉さん——」

冴えて、澄み、すこし掠れた細い声。が、これには銚吉が幹の支えを失って、手をはず

して落ちようとした。堂の縁の女でなく、大榎の梢から化鳥が呼んだように聞えたのである。

「……小県さん、ほんとうの小県さんですか。」

この場合、声はまた心持濁れたようだが、やっぱり澄んで、はつきりした。

夏は簾、冬は襖、間を隔てた、もの越は、人を思うには一段、床しく懐しい。……聞覚

えた以上であるが、それだけに、思掛けなさも、余りに激しい。――

まだ人間に返り切れぬ。薙刀怯えの蟬は、少々震声して、

「小県ですよ、ほんとう以上の小県銑吉です、私です。――ここに居ますがね。……築地

の、東京の築地の、お誓さん、きみこそ、いや、あなたこそ、ほんとうのお誓さんですか

。」

「ええ、誓ですの、誓ですの、誓の身の果なんですの。」

「あ、危い。」

長刀は朽縁に倒れた。その刃の平に、雪の掌を置くばかり、たまたよと崩折れて、

顔に片袖を蔽うて泣いた。身の果と言う……身の果か。かくては、一城の姫か、うつくし

い腰元の――敗軍には違いない――落人となつて、辻堂に徜徉った伝説を目のあたり、

見るものの目に、幽窃、玄麗の趣があつて、娑婆近い事のように思われぬ。

話は別にある。今それを言うべき場合でない。築地の料理店梅水の娘分で、店はこの美人のために賑つた。早くから銚吉の恋人である。勿論、その恋を得たのでもなければ、意を通ずるほどの事さえも果さないうちに、昨年の夏、梅水が富士の裾野へ暑中の出店をして、避暑かたがた、お誓がその店を預つたのを知つただけで、この時まで、その消息を知らなかつた次第なのである。……

その暑中の出店が、日光、軽井沢などだったら、雲のゆききのゆかりもあろう。ここは、関屋を五里六里、山路、野道を分入つた僻村であるものを。――

――実は、銚吉は、これより先き、麓の西明寺の庫裡の棚では、大木魚の下に敷かれた、女持の提紙入を見たし、続いて、准胝観音の御厨子の前に、菩薩が求児擁護の結縁に、紅白の腹帯を据えた三方に、置忘れた紫の女扇子の銀砂子の端に、「せい」としたのを見て、ぞつとした時さえ、ただ遙にその人の面影をしのんだばかりであつたのに。かえつて、木魚に圧された提紙入には、美女の古寺の凌辱を危み、三方の女扇子には、妊娠の婦人の生死を懸念して、別に爺さんに、うら問いもしたのであつたが、爺さんは、耳をそらし、口を避けて、色ある二品のいわれに触れるのさえ厭うらしいので、

そのまま黙した事実があった。

ただ、あだには見過し難い^{がた}、その二品に対する心ゆかしと、帰路^{かえり}には必ず立寄るべき心
 のしるしに、羽織を脱いで、寺にさし置いた事だけを――言い添えよう。

いずれにしても、ここで、そのお誓に逢おうなどとは……^{たとえ}譬にこまつた……間に合わせ
 に、されば、箱根で田沢湖を見たようなものである。

三

「――余り不思議です。お誓さん、ほんとお誓さんなら、顔を見せて下さい、顔を……
 こつちを向いて、」

ほとんど樹の枝に乗った位置から、おのずと出る声の調子に、小泉は自分ながら不気味
 を感じた。

きれぎれに、

「お恥かしくって、そちらが向けないほどなんですもの。」

泣声だし、唇を含んでかすれたが、まさか恥かしいという顔に異状はあるまい。およそ

薙刀を閃めかして薙ぎ伏せようとした当の敵に対して、その身構えが、背後むきになって、堂の縁を、もの狂わしく駆廻つたはおろか、いまだに、振向いても見ないで、胸を、腹部を袖で秘すらしい、というだけでも、この話の運びを辿つて、読者も、あらかじめ領かるであらう、この婦は妊娠している。

「私が、そこへ行きますが、構いませんか。今度は、こっちで武芸を用いる。高いこの樹の根からだど、すれすれだから欄干が飛べそうだから。」

婦は、格子に縋つて、また立った。なおその背後向きのままで居る。

「しかし、その薙刀を何とかして下さらないか。どうも、まことに、危いですよ。」

「いま、そちらへ参りますよ。」

落ついて静にいうのが、遠く、築地の梅水で、お酌ねだりをたしなめるように聞えて、銚吉はひとりで苦笑した。すぐに榎の根を、草へ下りて、おとなしく控え待った。

枝がくれに、ひらひらと伸び縮みする……という蛇体にきこえる、と悪い。細りした姿で、薄い色の褌を引上げ、腰紐を直し、伊達巻をしめながら、襟を搔合わせ搔合わせるのが、茂りの彼方に枝透いて、簾越に薬玉が消えんとする。

やがて、向直つて階を下りて来た。引合わせている袖の下が、脇明を洩れるまで、ふ

つくりと、やや円い。

牡丹ぼたんを抱いだいた白鷺の風情である。

見まい。

「水をのみます。小泉さん、私……息が切れる。」

と、すぐその榎の根の湧水わきみずに、きように棲を膝に挟んで、うつむけにもならず尋常に二の腕をあらわに挿入さしいれた。榎の葉蔭に、手の青い脈を流れて、すぐ咽喉のどへ通りそうに見えたが、掬くもうとすると、掌たなそこが薄く、玉の数珠じゆずのように、雫しずくが切れて皆溢こぼれる。

「両掌りようてでなさい、両掌で……明神様の水でしょう。野郎に見得も何なにもいりやしません。」

「はい、いいえ。」

膝の上へ、胸をかくして折りかけた袖を圧おさえ、やっぱり腹部を蔽おほうた、その片手を離さない。

「だって、両掌を突込つっこまないじゃ、いけないじゃありませんか。」

「ええ、あの柄杓ひしゃくがあるんですけど。」

「柄杓、」

ちようずばち
手水鉢に。

「ああ、手近です。あげましょう。青い苔こけだけでもね、乾いているから安心です、さあ」

「済みません、小泉さん、私知っていましたんですけど、つい、とつちてしまいましたの」

「ところで……ちよつとお待ちなさい。この水は飲んで差支えないんですかね。」

「ええ、冷い、おいしい、私は毎日のように飲んでいます。」

それだと毎日この祠ほくらへ。

「あ、あ。」

と、消えるように、息を引いて、

「おいしいこと、ああ、おいしい。」

唇も青澄んだように見える。

「うらやましいなあ。飲んだらこつちへ貸して下さい。」

「私が。」

とて、柄を手巾ハンケチで拭いたあとを、見入っていた。

「どうしました。」

「髪がこんなですから、毛が落ちているといけませんわ。」

「なみなみ満々と下さい。ありがたい、これは冷い。一気には舌が縮みますね。」

とぐつと飲み、

「甘露が五臓へ沁しみます。」

と清すずしく云った。

小県の顔を、すつと通った鼻筋の、横顔で斜ななめに視みながら、

「まあ、おきれいですこと。」

「水？……勿論！」

「いいえ、あなたが。」

「あなたが。」

「さつき、絵馬を見ていらつしやいました時もおきれいだと思つたんですが、清水を一息にめしあがる処が、あの……」

「いや、どうも、そりやちと違いますよう。牛肉のバタ焼の黒煙を立てて、腐った樽柿の息を吹くのと、明神の清水を汲くんで、松風を吸つたのでは、それは、いくらか違わなくつ

ては。」

と、はじめて声を出して軽く笑った。

「透通るほどなのは、あなたさ。」

「ええ。」

と無邪気にうけながら、ちよつと眉を顰めた。乳の下を且つ蔽う袖。

「一度、二十許りの親類の娘を連れて、鬼子母神へ参詣をした事がありますがね、桐

の花が窓へ散る、しんとした御堂の燈明で視た、襟脚のよさというものは、拜んで閉じた

目も凜として……白さは白粉以上なんです。——前刻も山下のお寺の觀世音の前で……

お誓さん——女持の薄紫の扇を視ました。ああ、ここへお参りして拜んだ姿は、どんなに美しかろうと思いましたが。」

誓はうつむく。

その襟脚はいうまでもなからう。

「その人もわかりました。いまおなじ人が、この明神様に籠ったのもわかったのです。が、お待ちなさいよ。絵馬を、私が視ていた時、お誓さんは、どこに居て……」

「ええ、そして、あの、何をしたんだとおっしゃいましょう。」

つと寄ると、手巾ハンケチを払った手で、柄杓の柄の半ばを取りしめた。その半ばを持ったまま、居処いどころをかえて、小泉は、樹の高根に腰を掛けた。

「言いますわ、私……ですが、あなたは、あなたは、どうして、ここへ……」

「おたずね、ごもつとものです。——少し気取るようだけれど、ちよつと柄にない松島見物という不了簡ふりようけんを起して……その帰り道なんです。——先祖の墓参りというと殊勝ですが、それなら、行きみちにすべき筈です。関屋まで来ると、ふと、この片原の在所の寺、西明寺ですね。あすこに先祖の墓のある事を、子供のうち、爺さん、祖母ばあさんに聞いていたのを思出しました。勿体ないが、ろくに名も知らない人たちです。

墓は、草に埋うずまつて皆分りません、一家遠国へ流転のうちに、無縁同然なんですから、寺もまた荒れていますしね。住職も留守で、過去帳も見られないし、その寺へ帰るのを待つ間に——しかし、そればかりではありません。

——片原の町から寺へ来る途中、田畝たんぼの道端に、お中食ちゅうじきの看板が、屋根、
 廂ひさしぐるみ、朽倒れに潰つぶれていて、清い小流こながれの前に、思いがけない緋牡丹ひぼたんが、
 お誓は、おくれ毛を摩なかし、顔を上げる。

「その花の影、水岸に、白鷺が一羽居て、それが、斑はんみよう——人を殺す大毒虫——みち

おしえ、というんですがね、引^{ひき}脚^{くわ}えて、この森の空へ飛んだんです。

まだその以前、その前ですよ。片原まで来る途中、林の中の道で、途中から、不意に、無理やりに、私の雇った自動車へ乗込んだ、いやな、不気味な人相、赤い服装、赤いヘルメット帽、赤い法衣^{ころも}の男が、男の子四人、同じ赤いシャツを着たのを連れて、猟銃を持ったのがありましてね。勝手な処で、山の下へ、藪^{やぶ}へ入って見えなくなったのが——この山^{つづき}続^{つづ}き^きのようですから、白鷺の飛んだ方角といい、社^{やしろ}のこのあたりか。ずつと奥になると言いますね、大沼か。どつちかで、夢のような話だけれど、神と、魔と、いくさでもはじまりそうな気がしたものですから。」

銃吉は話すうちに、あわれに伏せたお誓の目が、憤^{いきどおり}を含んで、屹^{きつ}として、それが無念を引きしめて、一層青味を帯びたのに驚いた——思いしことよ。……悪魔は、お誓の身にかわりがないのでない。

「……わけを言います、小泉さん、……言いますが、恥かしいのと、口惜^{くやし}いので、息が詰って、声も出なくなりましたら、こんな、私のような、こんな身体^{からだ}に、手をお掛けになるまでもありません。この柄杓の柄を、ただお離しなすって下さい。そのままのめって、人間の青い苔^{こけ}……」

「いや、こうして、あなたと半分持った、柄杓の柄は離しません。」

「あの、そのお優しいお心でしたら、きつめの水を下さいまし……私は、貴方^{あなた}を……おきれいだ、と申しましたわね、ねえ。」

「忘れました、そういう串^{じょうだん}戯^ごをきいていたくはないのです。」

「いえ、串戯ではないのですが。いま、あの、私は、あの薙刀で、このお腹^{なか}を引破^ひつて、肝^{きも}も臓腑^{ぞうふ}も……」

その水色に花野の帯が、薙^{しと}下^{みした}の敷居に乱れて、お誓の背とともに、むこうに震えているのが見える。榎の梢がざわざわと鳴り、風が颯^{さつ}と通った。

「——そこへ、貴方のお姿が、すつと雲からおさがりなすつたように……」

「何、私なら落ちたんでしよう。」

「そして、石段の上^{あがりくち}口に見えました。まるで誰も来ないのを知って、こちらへ参っているのですし、土地の巧者な、お爺さんに頼みまして、この二三日、来る人も留めてもらうように用意をしていましたんですもの！ 思いもよらない、参詣の、それが貴方。格子から熟^{じつ}と覗^{のぞ}いていますと、この水へ、影もうつりそうな、小泉さんなんですもの、貴方なんですもの。」

その爺さんにも逢っている。銚吉は幾度も独りうなずいた。

「こんな、こんな処、奥州の山の上で。」

「御同様です。」

「その拝殿を、一旦むこうの隅へ急いで遁げました。正面に奥の院へ通います階段と石段と。……間は、樹も草も蓬々と茂っています。その階段の下へかくれて、またよく見ました。寸分お違いなさらない、東京の小泉さん——おきれいなのがなおあやしい、怪しいどころか可恐いんです。——ばけものが来た、ばけて来た、畜生、また、来た。ばけものだ！……と思っただけです。」

「……………」

「その怪ものに、口惜い、口惜い、口惜い目に逢わされているんですから。……」

——畜生——

と声も出ないで。」

「ははあ、たちまち一打……薙刀ですな。」

「明神様のお持料です。それでも持ったのが私です、討てる、切れるとは思いませんが——畜生——叩倒してやろうと思つて、」

「切られる分には、まだ、不具かたわです。薙倒されては真ま二つつです、危い、危い。」
と、いまは笑った。

「堪忍して下さいな、貴方をばけものだと思つた私は、浅間あさましい獣けだものです、畜生です、犬です、犬に噛かまれたとお思ひになつて。」

「馬鹿なことを……飛んでもない、犬に咬かまれるくらいなら、私はお誓さんの薙刀に掛けられますよ。かすり疵きずも負わないから、太ふ腹とつばららしく太平樂をいうのではないんだが、怒りも怨みもしやしません。気やすく、落着いてお話しなさい。あなたは少しどうかしている、気を沈めて。……これは、ばけものの手触りかも知れませんよ。」

そこで、背せなに手を置くのに、みだれ髪が、氷のように冷たく触った。

「どうぞ、あの薙刀の飛やいばはないように。」

その黒髪は、漆の刃やいばのようにヒヤリとする。

水すべへ沁ひつた柄杓が、カンと響いた。

四

「……小唄さん、女が、女の不束で、絶家を起す、家を立てたい——」

「絶家を起す、家を起てたい……」

「ええ、その考えは、間違っていますでしょうか。」

「何が、間違いです。誰が間違いだと云いました。とんでもない、天晴れじゃありませんか。」

「私の父は、この土地のものなんです。」

「ああ、成程。」

「——この藩のちよつとした藩士だったそうなんです、道楽ものだったと思います。御維新の騒ぎに刀さしをやめたのは可いんですけれど、そういう人ですから、堅気の商売が出来ないで、まだ——街道が賑かだったそうですから、片原の町はずれへ、茶屋旅籠の店を出したと申しますの。」

……貴方、こちらへいらつしやりがけに——その、あの、牡丹、牡丹ですが。」

なぜか、引くいきに、声がかすれて、

「あの咲いております処は、今は田畝のようになりましたけれど、もと、はなれの庭だったそうですの……そして——」

牡丹は、父の手しおにかけましたものですって。……あとでは、料理ばかりにして、牡丹亭といったそうです。父がなくなりますと……それが人手から人手へ渡って、あとでは立ちぐされも同様。でも、それも、不景気で、こぼし屋の引取手もなしに、暴風雨で潰れたのが、家の骸骨がいこつのように路端みちばたに倒れていますわ。

母はその牡丹亭ごろの、おかみさん。……そんな事は申しませんでもいいんですけど、父とは、大層若くて年が違いました。

——町あたりの芸者だそうです。ですが、武家の娘だったせいですか——まだ、私がお腹に。……」

ふと耳許みみもとをほんのりと薄く染めた。

「お腹のうち、本所に居る東京の遠縁のものにたよって出まして、のちに、浅草で、また芸者をしたんですけれど、なくなります時、いまわの際まで、血統ちすじが絶える、田沢の家を、田沢の家をと、せめて後を絶たさないように遺言をしたんです。

私はその時分、新橋でお酌に出ておりました。十四や十五の考えで、この上一本になって、人の世話になるにした処で、一人で商売をした処で、家を立てるのぞみがありそうに思われません。だもんですから、都合をつけて道をかえまして、梅水へ奉公をしましたの

です。自分の口からお恥かしい、余りあからさまのようですが、つむりのものより、なりかたちより、少しでもお金を貯めて、小さな店でも出せますように、その上で、堅気の養子になる人を、縁があつたらと、思詰め、念じ切つておりました。

こんなものでも、一つ家うちに、十年の余も辛抱をしますうちには、お一人やお二方、相談をして下さる方のないこともなかったんですけど、田沢の家の養子とでは、まるでかけ離れました縁ですもの。冷たい顔して、きつぱりと、お断り申しました。それが、心得違いだったんです、間違つていたんです。ねえ。」

「間違いではありません。お誓さん、しかし、ただ、道も一ひとすじ条の上だとしたら、家を起す——血統を絶やさないと、真に立派な覚悟だけれど、……本当は女一人だとすると、どうしていいか、それは、学者でも、教育家でも、たとえばお寺の坊さんでも、実地に当たると、八やちまた衢ゆくてに前途が岐わかれて、道しるべをする事はむずかしい……世の中になったんですね。」

「まったくですわ。でも、それも、まだ月日は長し……昨日きのうや今日の事とは思わなかったんですのに——昨年、店の都合で裾野の方へ一夏まいりまして、朝夕、あの、富士山の景色を見ますにつけ……ついのおんびりと、一人で旅がしてみたくなったんです。一体出不精な処へ、お蔭様、店も忙しゅうございますし、本所の伯父伯母と云った処で、ほんの母が

たよりましたよりおや寄親同様。これといつて行きたい場所も知りませんものですから、旅をするなら、名ばかりでも、聞いただけ懐しい、片原を、と存じまして、十月小春のいい時間に、もみじもさかり、と聞きました。……

はじめて、泊りました、その土地の町の旅宿やどが、まわり合せですか、因縁だか、その宿の隠居夫婦が、よく昔の事を知っていました。もの珍らしいからでしょう、宿帳の田沢だけで、もう、ちつとでも片原に縁があるだろう、といひましてね。

そんなですから、隠居二人で、西明寺の父の墓も案内をしてくれますし。……まことに不思議な、久しく下草の中に消えていた、街道端ばたの牡丹が、去年から芽を出して、どうしてでしょう、今年の夏は、花を持った。町でも人が沢山見ゆに行き、下の流れを飲んで酔うといえ、汲くんで取つて、香水だと賞ほめるのもある。……お嬢さん……私の事です。」

と頬も冷たそうに、うら寂しく、

「故郷へ帰つて来て、田沢家を起す、瑞ずい祥しょうはこれで分つた、と下へも置かないで、それはほんとうに深切に世話をして、牡丹さん、牡丹さん、私の部屋が牡丹の間。餡子あんこではあんまりだ、黄色い白粉おしろいでもつけましょう、牡丹亭きな子です。お一ついかが……：そういつてどうかすると、お客にお酌をした事もあるんです。長逗留ながとまりゆうの退屈ばらし、それ

には馴なれた軽はずみ……」

歎ためいき息も弱々と、

「もつとも煩うるさいことでも言えば、その場から、つい立って、牡丹の間へ帰っていたんです。それというのが、ああも、こうもと、それから、それへ、商売のこと、家のこと。隠居夫婦と、主人夫婦、家のものばかりも四人でしょう。番頭ですの、女中ですの、入いりかわり相談をしてくれます。聞くだけでも楽たのしみで、つんだり、崩したり、切組みましたり、庭背戸まで見積みつて、子供の積木細工で居るうちに、日が経たちます。……鳥居数をくぐり、門松を視みないと、故郷とはいえない、といわれる通りの気になって、おまいりをしましたり。……逗留のうち、幾度、あの牡丹の前へ立つたでしょう。

柱一本、根太板も、親たちの手の触ったのが残っていきましょう。あの骨を拾おう。どうしよう。焚たこうか、埋めようか。ちよつと九尺二間を建てるにしても、場所がいまの田畝たんぼではどうにもならず。（地藏様の祠ほこちを建てなさい、）隠居たちがいうんです。ああ、いいわねえ、そうしましょうか。

思出しても身体からだがふるえる、……

今年二月の始はじめでした。……東京も、そうだったって聞いたんですが、この辺でも珍らし

く、雪の少い、暖かな冬でしたの。……今夜の豆撒まめまきが済むと、片原で年を取って、あかんぼも二つになると、隠居たちも笑っていました。その晩——暮方……

湯上りのいい心持の処へ、ちらちら降出しました雪が嬉しくって、生意気に、……それだし、銀座辺、あの築地辺の夜ふけの辻で、つまらない悪戯いたずらをされました覚えもなし、またいたずらに逢ったところで、ところ久しいだけ、門かどなみ知っているんです。……梅水のもですよ。それで大概、挨拶あいさつをして離れちまいますんですもの、道の可恐こわさはちつとも知らずにいたんです。——それに牡丹亭のあとまでは、つれがありましたり、一人でも幾度も行ったり来たり、屋根のない長い廊下もおんなじに思っていましたものですから、コオトも着ないで、小泉さん、浴衣に襟つき一枚何かで。——裙すそへ流れる水、あの小川も、梅水に居て、座敷の奥で、水調子を聞く音がします。……牡丹はもう、枝ばかり、それも枯れていたんですが、降る雪がすすきりと、白い苔つばみに積りました。……大輪おおりんなものも面影に見えるようです。

向うへ、小さなお地藏様のお堂を建てたら、お提灯ちようちんに蔦つたの紋、養子が出来て、その人のと、二つなら嬉しいだろう。まあ極きまりの悪い。……わざとお賽銭箱さいせんばこを置いて、宝珠の玉……違った、それはお稻荷様いなりさま、と思っっているうちに、こんな風に傘をさして、ちら

ちらと、藤の花だか、鷺だかの娘になって、踊ったこともあつたつけ。――傘は、ここで、
畳んだか、開いてさしたかと、うっかりしました。――傘を、ひどい力で、上へぐいと引
いたんです。天にも地にも、小泉さん、観音様と、明神様のほかには、女の身体で、口へ
出して……」

キリキリと齒を噛んで、つと瞼の色が褪せた。

「癩か。しつかりなさい、お誓さん。」

さそくに掬った柄杓の水を、削るがごとく口に含んで、

「人間がましい、癩なんぞは、通越しているんです。ああ、この水が、そのまんま、青い
煙になって焼いちまつてくれればいいのに。」

しばらく、声も途絶えたのである。

「口惜しいわ、私、小泉さん、足が上へ浮く処を、うしろから、もこん、と抱込んだもの
を、見ました時。」

わなわなと震えたから、小泉も肩にかけていた手を離した。倒れそうに腰をつくつと、棲
を投げて、片手を苔に這らした。

「灰汁のような毛が一面にかぶさつた。枯木のような脊の高い、蒼い顔した※々《ひひ》、

あの、絵の※々、そのの鼻、がまた高くて巨いのが、黒雲のようにかぶさると思いましたが……何にも分らなくなりました。

あとで——息の返りましたのは、一軒家で飴あめを売ります、お媼おばあさんと、お爺さんの炉端でした。裏背戸口へ、どきりと音がしたきりだった、という事です。

どんな形で、投ほうり出されていたんでしょう。」

棲を引合わせ、身をしめて、

「……のちに、大沼で、とれたといって、旅宿やどの台所に、白い雁がんが仰向あおむけに、俎まないたの上に乗ったのを、ふと見まして、もう一度ゾツとすると、ひきつけて倒れました事さえあるんです。

——その晩は、お爺さんの内から、ほんの四五町の処を、俤くるまにのって帰ったのです。急に、ひどい悪寒がするといって、引被ひつかぶつて寝ましたきり、枕も顔もあげられますもんですか。悪寒どころですか、身体からだはやけますようですのに、冷い汗を絞るんです。その汗が脇の下も、乳の処も、……ずくずく……悪臭い、鱧ふかだか、鮫さめだかの、六月いきれに、すえたような臭いにおでしょう。むしりたい、切って取りたい、削りたい、身体中がむかむかして、しつかりなしに吐くんです。

無理やりに服のまされました、何の薬のせいですか、有る命は死にません。——生きているかいはなし……ただ西明寺の観音様へお縫すがりにまいます。それだって、途中、牡丹のあるところを視みます時の心もちは、ただお察しにまかせます。……何の罪つみとが咎があるんでしょう、と思うのは、身勝手な、我身ばかりで、神様や仏様の目で、ごらんになったら。」

「お誓さん、……」

声を沈めて遮った。

「神、仏の目には、何の咎、何の罪もない。あなたのような人間を、かえって悪魔は狙うのですよ。幾年目かに朽ちた牡丹の花が咲いた……それは嘘ではありますまい。人は見て奇瑞きずいとするが、魔が咲かせたかも知れないんです。反対に、お誓さんが故郷へ帰った、その瑞ずい兆ちようが顕あらわれたとして、しかも家の骨に地藏尊を祭る奇特がある。功德、恭養、善行、美事、その只中ただなかを狙うのが、悪魔の役です。どっちにしろ可恐おそろしい、早くそこを通抜けよう。さ、あなたも目をつむつて、観音様の前へおいでなさい。」

「——ある時、和尚さんが、お寺へ紅白の切きれを、何ほどか寄進をして欲しいものじゃ、とおっしゃるんです。寺の用でない、諸人しよにんの施行せぎようのためじゃけれど、この通りの貧乏寺。……ええ、私の方から、おやくに立ちますならお願い申したいほどですわ。三反持つて参

りますと、六尺ずつに切りたいが、鋏はさみというものもなし……庖丁ではどうであろう。まあ、手で裂いても間に合いますわ。和尚さんに手伝つて三方の上へ重ねました時、つい、それまでは不信心な、何にも知らずにおりました。子育ての慈愛をなさいます、五月いわたおび帯のわけを聞きまして、時も時、折も折ですし、……観音様。」

お誓が、髪を長く、すつと立つて、麓ふもとに白い手を合わせた。

「つい女気で、紅あかい切を上へ積んだものですから、真上ないしよのを、内証ないしよで、そつと、頂いたんです。」

「それは、めでたい。——結構ではないか、お誓さん。」

お誓は榎の根に、今度は吻ほっとして憩さしつた、それと差さむかいに、小梟は、より低い処に腰を置いて、片足を前に、くつろぐ状さまして、

「節分の夜の事だ。対手あいてを鬼と思いたまえ。が、それも出放題過ぎるなら、怪我……病氣だと思ったらどうです。怪我や病氣は誰もする。……その怪我にも、病氣にも障りがなくて、赤ちゃんが、御免なさいよ、ま、出来たとする。昔から偉人には奇蹟が携わる、日を見て、月を見て、星を見て、いや、ちと大道うらないに似て来たかね。」

袖を開いて扇を使った。柳の影が映りそうで、道得いいてて、いささか可よしと思つたらしい。

「鶴を視て懷妊した駿はいくらもある。いわゆる、もうし子だとお思いなさい。その上、面倒な口を利く父親なしに、お誓さん一人で育てたら、それが生一本の田沢家の血統じゃありませんか。そうだ、悪魔などと言ったのは、私のあやまり、豊年の何とかいう雪が降って、節分には、よく降るんです。正に春立ならんとする時、牡丹に雪の瑞といい、地藏菩薩の祥といい、あなたは授りものをしたんじゃないか、確にそうだ、——お誓さん。」

お誓は淡くまた瞼を染めた。

「そんな、あの、大それた、高望みはしませんけれど、女の子かも知れないと思いました。五日、七日、二夜、三夜、観音様の前に静としていますうちに、そういうば、今時、天狗も※々《ひひ》も居まいし、第一獣の臭気がしません。くされたというは心持で、何ですか、水に棲むもののような気がするし、森の香の、時々峰からおろす松風と一所に通つて来るのも、水神、山の神に魅入られたのかも分らない。ええ、因果と業。不具でも、虫でもいい。鳶鴉でも、鮎、鱸でも構わない。その子連れて、勧進比丘尼で、諸国を廻つて親子の見世ものになったらそれまで、どうなるものか。……そうすると、気が易くなりました。」

「ああ、観音の利益だなあ。」

つと顔を背けると、肩をそいで、お誓は、はらはらと涙を落した。

「その御利益を、小県さん、頂いてだけいればよかつたんですけれど——早くから、関屋からこの辺かけて、鳥の学者、博士が居ます。」

「……………」

「鳥の巣に近づくため、撃つために、いろいろな^{なり}……あんな形もする、こうもする。……頭に樹の枝をかぶったり、かずらや枯葉を腰へ巻いたり……何の気もなしに、孫八ツて……その飴屋の爺さんが夜話するのを、一言……」

(……………)

「焼火箸を脇の下へ突貫^{つきぬ}かれた気がしました。扇子^{おうぎ}をむしって棄^すちようとして、勿体ない、観音様に投げうちをするようなと、手が痺^{しび}れて落したほどです。夜中に谷へ飛降りて、田沢の墓へ囁^かみつこうか、とガチガチと齒が震える。……路^{みち}傍^{ばた}のつぶれ屋を、石油を掛けて焼消^{しょう}そうか。牡丹の根へ毒を絞つて、あの小川をのみ干そうか。

もうとても……大慈大悲に、腹帯をお守り下さいます、観音様の前には、口惜^{くやし}くつて、もどかしくつて居^{いた}堪^{たま}らなくなつたんですもの。悪念、邪心に、肝も魂も飛上つて……あ

ら神様で、崇たたりの鋭い、明神様に、一昨日と、昨日きのう、今日……」

——誓ただひとりこの御堂みどうに——

「独り居れば、ひとり居るほど、血が動き、肉が震えて、つきます息も、千本の針で身体中さすようです。——前刻さつきも前刻、絵馬の中に、白い女の裸身はだかみを仰向けにくくりつけ、膨れた腹を裂いています、安達あたちヶ原の孤家ひとりつやの、もの凄すごいを見ますとね。」

（——実は、その絵馬は違っていた——）

「ああ、さぞ、せいせいするだろう。あの女は羨しいと思いますと、お腹なかの裡で、動くのが、動くばかりでなくなつて、もそもそ這はうような、ものをいうような、ぐっぐつ、と巨おおきな鼻が息をするような、その鼻が舐なめるような、舌を出すような、蒼黄色あおぎいろい顔——畜生——牡丹の根で気絶して、生死いきしにも知らないでいたうちの事が現うつに顕あらわれて、お腹なかの中うちで、土蜘蛛つちぐもが黒い手を拵しらげるように動くんですもの。

帯を解いて、投げました。

ええ、男に許したのではない。

自分の腹むきだを露出したんです。

芬ぶんと、麝香じゃこうの薫かおりのする、金欄きんらんの袋を解いて、長刀ながなたを、この乳の下へ、平当てにヒ

やりと、また芬と、丁子ちようじの香がしましたのです。」……

この薙刀を、もとのなげしに納める時は、二人がかりで、それはいいが、お誓が刃の方を支えたのだから、おかしい。

誰も、ここで、薙刀で腹を切ったり、切らせたりするとは思うまい。

——しかも、これを取はずしたという時に落したのであろう。女の長い切髪きりかみの、いつ納めたか、元結もとゆいを掛けて黒い水引でしめたのが落ちていた。見てさえ気味の悪いのを、静しずかに掛直した。お誓は偉い！……落着いている。

そのかわり、気の静まった女に返ると、身だしなみをするのに、ちよつと手間が取れた。下じめ——腰帶から、解いて、しめ直しはじめたのである。床へ坐つて……

ちつと擦くすくすつたいばかり。こういう時の男の起居挙動たちいふるまいは、漫画でないと、容易にその範容が見当らない。小唄は一つ一つ絵馬を視みていた。薙刀の、それから始めて。——

一度横目を流したが、その時は、投げた単衣ひとえの後、棲うしろづまを、かなぐり取った花野の帯の輪で守護して、その秋草の、幻に夕映ゆる、蹴出けだしの色の片膝を立て、それによりかかるように脛はざをあらわに、おくれ毛を撫なでつけるのに、指のさきをなめるのを、ふと見まじい

ものを見たように、目を外らした。

「その絵馬なんですわ、小県さん。」

起つと、坐ると、しかも背中合せでも、狭い堂の中の一つ処で、氣勢は通ずる。安達ヶ原の……

「お誓さん、気のせいだ。この絵馬は、俎まないたの上へ——裸はだか体の恋絹を縛つたのではない。白鷺を一羽仰向けにしてあるんだよ。しかもだね、料理をするのは、もの凄い鬼婆おにばば々じやなくつて、鰯たこの口を尖とがらした、とぼけた爺さん。笑わせるな、これは願事ねがいごとでなくて、殺生をしない戒めの絵馬らしい。」

事情ことがらも解よめている。半ば上の空でいううちに、小県のまた視ながめていたのは、その次の絵馬で。

はげて、くすんだ、泥絵具で一刷毛ひとけなすりつけた、波の線が太いから、海を被かついだには違いない。……鰯かと思うと脚が見えぬ、鰯かれい、比目魚ひらめには、どんよりと色が赤い。赤あかえいだ。が何を意味する？……つかわしめだと聞く白鷺を引立たせる、待女郎まちじやうの意味の奉納か。その待女郎の目が、一つ、黄色に照つて、縦にきらきらと天井の暗さに光る、と見つつ、且つその俎の女の正体をお誓に言うのに、一度、気を取られて、見直した時、ふと、

もうその目の玉の縦に切れたのが消えていた。

斑 はんみょう だ。斑 はん が留 とど っていた。

「お誓さん、お誓さん。——その辺に、綺麗 きれい な虫が一つ居はしませんか、虫が。」

「ええ。」

「居る？」

「ええ。居ますわ。」

バタリと口に啣 くわ えた櫛 くし が落ちた。お誓は帯のむすびめをうしろに取って、細い腰をしめさまに、その引掛 ひっか けを手繰 と っていたが、

「玉虫 かんざし でしょう、綺麗 きれい な。ええ、人間は、女は浅間 あま しい。すぐに死なないと思ったら、簪 かんざし も衣 ほし もものも欲 ほ いんです。この場所ですから、姫神様 きみかみ が下さるんだと思 おも いました、ちよつと、櫛 くし でおさえました。ツイとそれて、取損 と って、見えませんわ。そちらに居 い ませんか？」

玉虫 かんざし でしょう。」

筐 かたみ の簪 かんざし、簞笥 たんす の衣 きぬ、薙刀 たぎ で割 き く腹より、小梟 こきう はこの時、涙 なみだ ぐんだ。

いや、懸念 けんねん に堪 た えな。

「玉虫 かんざし どころか……」

名は知るまいと思うばかり、その説明の暇もない。

「大変な毒虫だよ。――支度はいいいね、お誓さん、お堂の下へおりて下さい。さあ……その櫛……指を、唇へ触りはしまいね。」

「櫛は峰の方を啣えました。でも、指はあの、鬢^{びん}の毛を撫でつけます時、水がなかったもんですから、つい……いいえ、毒にあたれば、神様のおぼしめしです。こんな身体^{からだ}を、構わんですわ。」

ちよつとなまつて、甘えるような口ぶりが、なお、きつぱりと断念^{あきらめ}がよく聞えた。いやが上に、それも可哀^{あわれ}で、その、いじらしさ。

「帯にも、袖にも、どこにも、居ないかね。」

再び巨^{おおえのき}榎^{みどり}の翠の蔭に透通る、寂しく澄んだ姿を視^みた。

水にも、満つる時ありや、樹の根の清水はあふれたり。

「ああ、さつき水を飲んだ時でなくて可^よかった。」

引立てて階^{きざはし}を下りた、その葩^{しとみごうし}格子の暗い処に、カタリと音がした。

「あれ、薙刀がはずれましたか。」

清水の面^{おもて}が、柄杓^{ひしゃく}の苔^{こけ}を、琅玕^{ろうかん}のごとく、梢^{こすえ}もる透間^{すきま}を、銀象嵌^{ぎんぞうがん}に鏤^{ちりば}めつつ、そ

のものの音の響きに揺れた。

「まあ、あれ、あれ、ご覧なさいまし、長刀が空を飛んで行く。」……

榎の梢を、兎のような雲にのつて。

「桃色の三日月様のように。」

と言った。

松島の沿道の、雨晴れの雲を豆腐に、陽炎^{かげろう}を油揚げに見物したという、外道俳人、小島の目にも、これを仰いだ目に疑いはない。薙刀の鋭き刃^とのように、たとえば片鎌の月のように、銀光を帯び、水紅^{ときうすもの}の羅して、あま翔^{かけ}る鳥の翼を見よ。

「大沼の方へ飛びました。明神様の導きです。あすこへ行きます、行つて……」

「行つて、どうします？　行つて。」

「もうこんな気になりましたは、腹の子をお守り遊ばす、観音様の腹帯を、肌につけてはもらえません。解きます処、棄てます処、流す処がなかったのです。女の肌につけたものが一度は人目に触れるんですもの。抽斗^{ひきだし}にしまつて封をすれば、仏様の情^{なさけ}を仇^{あだ}の女の邪念^{ひる}で、蛇、蛭に、のびちぢみ、ちぎれて、蜘蛛^{くも}になるかも知れない。やり場がなかったんですのに、導^{さと}びきと一所に、お諭^{さと}しなんです。小島さん。あの沼は、真中^{まんなか}が渦を巻いて

底知れず水を巻込むですって、爺さんに聞いています……」

と、銚吉の袂たもとの端しかを確と取った。

「行く道が分つていますか。」

「ええ、身を投げようと、……二度も、三度も。」――

欄干の折れた西の縁の出端はすれから、袖形に地の摩なびく、向うの末の、雑樹ぞうき茂り、葎むぐら蔽おおい、ほとんど国を一重隔てた昔話の音せぬ滝のようなのを、猶ため予らわず潜くぐる時から、お誓が先に立った。おもいのほか、外は細い路が畝うねつて通った。が、小県はほとんど山姫に半ばを誘わるる思いがした。ことさらにあとへ退さがつたのではない、もう二三尺と思いつつ、お誓の、草がくれに、いつもその半身、縞絹しまぎぬに黒髪した遁水にげみずのごとき姿を追ったからである。

沼は、不忍しのばずの池を、その半なかばにしたと思えば可い。ただ周囲に蒺藂おううつとして、樹が茂つて暗い。

森をくぐつて、青い姿見が蘆間あしまに映つた時である。

汀なぎさの、斜向はすむこうへ――巨おおきな赤い蛇が頭あちわれた。蘆萱かやを引伏せて、鎌首を挙げたのは、真ま赤なヘルメット帽である。

小梟が追^{おい}継^{すが}る隙もなかつた。

衝^つと行く、お誓^{ちか}が、心せいたか、樹と樹の幹にちよつと支えられたようだったが、そのまま両手で裂くように、水に襟を開いた。玉なめらかに、きめ細かに、白^{しろ}妙^{たえ}なる、乳首の深秘は、幽^{かすか}に雪間の莖^{すみれ}を装い、牡丹冷やかにくずれたのは、その腹帯の結びめを、伏目に一目、きりきりと解きかけつつ、

「畜生……」

と云つた、女の声とともに、劔^{こたま}が冴えて、銃が響いた。

小梟は草に、伏^{ふせ}の構^{かまえ}を取つた。これは西洋において、いやこの頃は、もつと近くで行^やるかも知れない……爪さきに接吻^{キス}をしようとしたのではない。ものいう間^まもなし、お誓^{ちか}を引倒して、危難を避けさせようとして、且つ及ばなかつたのである。

その草^{くさ}伏^{ふし}の小梟の目に、お誓^{ちか}の姿が——峰^ねを抽^ぬいて、高く、金^{こん}色^{しき}の夕日に聳^そば^だつて見えた。斉^{ひと}しく、野の燃ゆるがごとく煙つて、鼻の尖^{とが}つた、巨^{おお}なる紳士が、銃を倒す、と斉しく、ヘルメット帽を脱いで、高くボンと空へ投^なげて、拾^{ひろ}つて、また投^なげて、落^おちると、宙に受けて、また投^なげるのを視^みた。足でなく、頭で雀^{こおどり}躍^{どり}したのである。たちまち、法衣^{ころも}を脱ぎ、手早く靴を投^なげると、勢^{いきおい}よく沼へ入つた。

続いて、赤少年が三人泳ぎ出した。

中心へ近づくままに、掻く手の肱ひじの上へ頭あちわれた鼻の、黄色に青みを帯び、茸きのこのくさりかかったような面おもてを視た。水に拙つたないのであろう。喘あえぐ——しかむ、泡を噴く。が、あるいは鳥に對する隠形おんぎようの一術ひとてであらうも計られぬ。

「ばか。」

投棄てうきてるようにいうとともに、お誓はよろよと倒れて、うつとりと目を閉じた。

早く解いて流した紅くれなゐの腹帯は、二重三重にわがなつて、大輪の花のようなのを、もろ翼はを添えて、白鷺が、すれすれに水を切つて、鳥旦那きたの来り迫る波がしらと直線に、水脚を切つて行く。その、花片はなびらに、いやその腹帯の端に、キラキラと、虫が居て、青く光つた。鼻を仰向け、諸手もろてで、腹帯を掴つかむと、紳士は、ずぶずぶと沼に潜つた。次に浮きざまに翻ひるがえつた帯は、翼かと思う波を立てて消え、紳士も沈んだ。三個の赤い少年も、もう影もない。

ただ一人、水に入ろうとする、ずんぐりものの色の黒い少年を、その諸足を取つて、孫八爺じいが押えたのが見える。押えられて、手を突つ込んだから、脚をばったのように、いや、ずんぐりだから、蟋蟀こおろぎのように、いて、頭で白うすを搗ついていた。

「——そろそろと歩行あるいて行き、ただ一番あとのものを助けるよう——」

途中から女の子に呼戻させておいて、媼巫女うばみこ、その孫八爺さんに命ずるがごとくに云つて——方角を教えた。

ずんぐりが一番あとだったのを、孫八が来て見出したとともに、助けたのである。

この少年は、少なからぬ便宜を与えた。——しらべ検する官人の前で、

「——三日以来、大沼が、日に三度ずつ、水の色が真赤まっかになる情報があつたであります。

緋ひの鳥が一羽ずつ来るのだと鳥博士が申されました。奇鳥で、非常な価値である。十分に準備を整えて出向つたであります。果して、対岸に真紅まっかな鳥が居る。撃つたであります。

銃の命中したその鳥は、沼の中心へ落ちたであります。従つて高級なる獵犬として泳いだのであります。」

と明確に言つた。

のみならず、紳士の舌には、斑がねばりついていた。

一人として事件に煩わされたものはない。

汀なぎさで、お誓を抱いた時、惜しや、かわいそうに、もういけないと思つた。胸に硝薬しょうやく

のにおいがしたからである。

水を汲くもうとする処へ、少年を促がしつつ、廻り駈がけに駈けつけた孫八あわただが慌しく留めた。水を飲んじやなりましねえ。山野に馴れた爺の目には、沼の水を見さつせえ、お前等めえらがいった、毒虫が、ポカリポカリ浮いてるだ。……

明神まで引返す、これにも少年が用立つた。爺さんにかわつて、お誓を背にして走った。清水につくと、魑魅すだまが枝を下り、茂りの中から頭あわれたように見えたが、早く尾根つえついたして、八十路やそじに近い、脊の低い柔和なお媼ばあさんが、片手に幣結しでゆえる櫛さかきを持ち、杖はついたが、健すこやかに来合わせて、

「苦勞さしやつたの。もうよし、よし。」

と、お誓のそのふくよかな腹を、袖の下で擦さつて微笑ほほえんだ。そこがちようど結び目の帯留の金具を射て、弾丸たまは外それたらしい。小指のさきほどの打身うすがあった。淡いふすぼりが、媼うばの手が櫛を清水にひたして冷すうちに、ブライツツケルの冷罨れいあんぼう法にも合かなえるごとく、やや青く、薄紫にあせるとともに、乳ちが銀の露に汗ばんで、濡色の睫毛まつげが生きた。

町へ急ぐようにと云つて、媼はなおあとへ残るから、

「お前様は？」

お誓が聞くと、

「姫神様がの、お冠の纓が解けた、と御意じゃよ。」

これを聞いて、活ける女神が、なぜみずからのその手にて、などというものは、烏帽子折を思わるるがいい。早い処は、さようなお方は、恋人に羽織をきせられなからう。袴腰も、御自分で当て、帽子も、御自分で取っておかぶりなさい。

五

神巫たちは、数々、顕霊を示し、幽冥を通じて、俗人を驚かし、郷土に一種の権力をさえ把持すること、今も昔に、そんなにかわりなく、奥羽地方は、特に多い、と聞く。むかし、秋田何代かの太守が郊外に逍遙した。小やすみの庄屋が、殿様の歌人なのを知って、家に持伝えた人麿の木像を献じた。お覚えのめでたさ、その御機嫌の段いうまでもない——帰途に、身が領分に口寄の巫女があると聞く、いまだ試みた事がない。それへ案内をせよ。太守は人麿の声を聞こうとしたのである。

しのびで、裏町の軒へ寄ると、破屋あばらやを包む霧寒く、松韻まつぎん颯々さつさつとして、白衣びやくえの巫女が口ずさんだ。

「ほのぼのと……」

太守は門かどぐち口を衝と引いた。「これよ。」「ははッ。」「巫女に謝儀をとらせい。……

あの輩やからの教化は、士分にまで及ぶであろうか。」「泣きみ、笑いみ……ははッ、ただ婦女子のもてあそびものにござりまする。」「さようか——その儀ならば、……仔細しさいない。

が、孫八の媼うばは、その秋田辺のいわゆる（おかみん）ではない。越後路えちごじから流漂るひようした、その頃は色白な年増であつた。呼込んだ孫八が、九郎判官は恐れ多い。弁慶が、ちようはん、熊坂ではなく、賽さいの目の口でも寄せようとしたのであろう。が、その女振ぶりを視みて、口く説といて、口を遁にげられたやけ腹に、巫女の命とする秘密の箱はこを攫さらつて我が家を遁にげて帰らない。この奇略は、モスコオの退都に似ている。悪孫八が勝ち、無理が通つた。それも縁であろう。越後巫女みこは、水飴みずあめと荒物を売り、軒に草鞋わらじを釣つるして、ここに姥塚うばづかを築くばかり、あとを留とどめたのであると聞く。

——前略、当寺檀那、孫八どのより申上げ候。入院中流産なされ候御婦人は、いまは大方に快癒、鬱散のそとあるきも出来候との事、御安心下され度候趣、さて、ここに一昨夕、大夕立これあり、孫八老、其の砌某所墓地近くを通りかかり候折から、天地晦冥、雹の降ること凄まじく、且は電光の中に、清げなる婦人一人、同所、鳥博士の新墓の前にイみ候が、冷く莞爾といたし候とともに、手の壺微塵に碎け、一塊の鮮血、あら土にしぶき流れ、降積りたる雹を染め候が、赤き霜柱の如く、暫時は消えもやらず有之候よし、貧道など口にいたし候もいかが、相頼まれ申候ことづてのみ、いずれ仏菩薩の思召す処にはこれあるまじく、奇しく厳しき明神の嚮導指示のもとに、化鳥の類の所為にもやと存じ候——

西明寺 木魚。

和尚さんも、貧地の癖に「木魚」などと洒落れている。が、それはとにかく——（上人の手紙は取意の事）東京の小県へこの来書の趣は、婦人が受辱、胎蔵の玻璃を粉碎して、汚血を獵色の墳墓に、たたき返したと思われぬでもない。

昭和八（一九三三）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年3月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

神鷺之巻

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>